心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ⑯

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

重い、思い、想い。

今から50年前、私は小さい頃からおデブちゃんで、周りの子より二回りも大きい女の子でした。ですからその頃は、いつも友達のお母さんや、近所のおばさんに「大きいね～」と言われていました。

でも、私は太っていることが嫌だったので正直、こころよくは思ってはいませんでした。

春、家族でお花見にいった時、柵を越えるために父が私を抱き上げて、「お～、重いな～」と言いました。何気なく言った父のひと言で、幼心に傷つきました。

女の子は幼くても、とても気にしているものです。

それからというもの、父に抱っこされるのが嫌で嫌で、抱っこしようとする父から逃げる様になってしまいました。ついに小学校の6年間一度も父に抱っこされることなく過ごしてしまいました。

おデブちゃんだった私も身長が伸びると共に肥満体型ではなくなりました。

仲が悪いという事では無いのですが、中学生の女の子が父親に抱っこされることなどなく、気が付けば成人し、結婚。私も親になり、あれから、50年。孫もできました。

ある日、3歳の孫を夫が抱いて「重いな～」と言ったのです。

忘れていた当時の記憶が鮮明に蘇りました。瞬間、「なんてことを言うの！」と言うと夫がキョトンとして「え？大きくなったなあ、ってことだよ」と言われ、はっとしました。そうか、そういうことかと妙に納得してしまいました。

そうすると「なんだか父に悪いことしたな」という思いになりました。

重い＝太っているというのは先入観だったのかもしれません。

少しして、父が体調を壊して入院しました。今は83歳です。大病ではないのですが、年齢の事もあるので、家族一同心配です。病院が近いという事もあり、父の世話に病院に通いました。

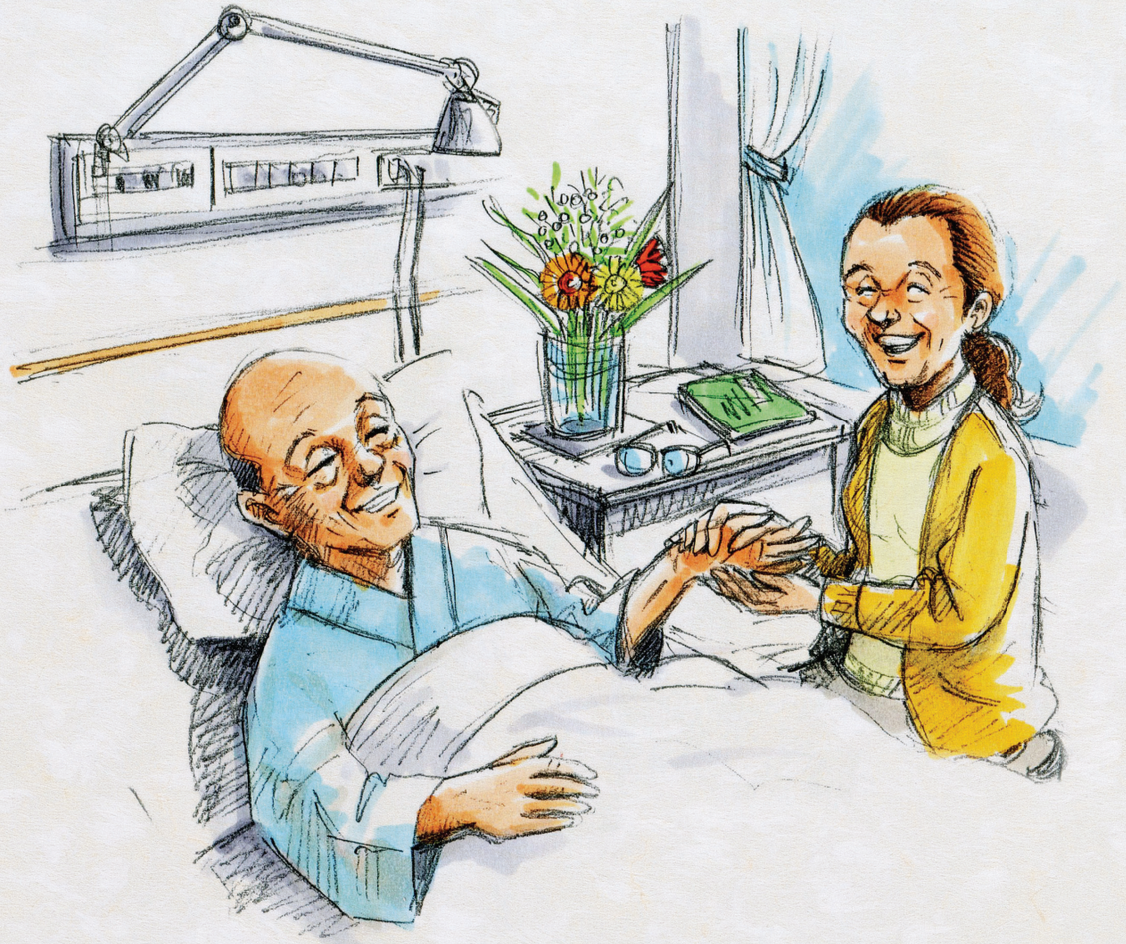
そして、最初に二人きりになった日、見舞った父の手をベッドで握りました。

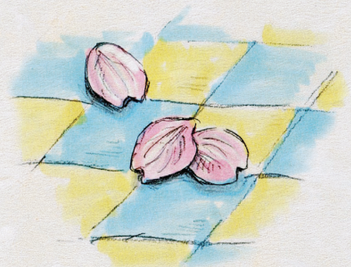
大きく厚かった手は、いつの間にか筋張った年寄りの手になっていました。

その瞬間、私はじわっと涙がこぼれました、それを見た父も涙しました。お互いに恥ずかしくなって笑いました。でもそれはとてもとても幸せな瞬間でした。

それから見舞う度、手を握りながら話をするようになりました。戦時中、淡路島に疎開していた時の話、終戦後の苦しい生活の話など、これまで聞いたことのない話をたくさん聞きました。話すうちにこれが、命を繋ぐという事なのだと感じました。たくさんたくさん話を聞きました。

お陰様で、退院することができ、父は元気です。これからも一緒の時間を大切に紡いでいくつもりです。





愛する人と共に過ごした数時間、
数日もしくは数年を経験しない人は、
幸福とはいかなるものであるかを知らない。
スタンダール

博愛の国フランスの小説家の言葉です。
本当の幸福がどこにあるのか、
きっとそれは身近なところです。
毎日顔を合わせるその人の事をもっと見つめてみませんか。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。